

## 教育現場で活躍できる教師の養成を目指して

土屋 弥生<sup>1)</sup>

現代社会において、教育現場が抱える問題は多岐にわたっているが、中でも「教師の資質・能力の向上」については教育の根幹に関わることでであると考える。中央教育審議会は平成27年12月に「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」を答申としてまとめているが、実際の教育現場においては、いじめや不登校などの諸問題への対応、保護者との関係構築、特別な支援を要する生徒への指導など、教師が直面する課題や問題は深刻であって、日々、早急な対応を求められるのが現実である。教師に求められる資質や能力については、じっくりと時間をかけてその養成と向上に取り組んでいくべきところであるが、教員免許を取得して現場に立ったその日から、大きな責任が一人ひとりの教師に課せられるのもまた現実である。

教育は子どもたちの成長を目指し、豊かな学びを支えていく活動であることは言うまでもない。教師が心に余裕をもって、一人ひとりの児童・生徒と向き合っていくためにも、やはり課題や問題を乗り越えて、実りある教育活動を展開していくための力がどうしても必要となる。現場で教師に必要な実践的指導力を、大学での教育の中でどのように身につけていけるのか。実践的指導力についてはその能力の定義について議論のあるところではあるが、理論として学ぶ知とともに、身体能力として身につけるべき実践知（土屋（2017）「生徒指導における身体能力としての教師の実践的指導力に関する試論」：『桜門体育学研究』第52集）を中心とする総合的な力であると考え。このような理論としての知と身体能力としての実践知の獲得を念頭に、文理学部の

教職センターの一員として教職教育に携わる者として、現場で活躍できる教師の養成に尽力したいと考えている。

教職センターにおいては、教職課程教育と教職支援教育のそれぞれの機能の充実に加え、それらの相互作用を目指した包括的な教職教育が目指されることになるであろう。前述の通り、教育現場で必要となる「知」の養成は多様なものでなければならない。

教職センターにおける筆者のおもな取り組みとしては、教職課程内の科目や教育実習に関する指導はもちろんのこと、教育現場における実践知について学生が身をもって学ぶための教職インターンシップ、文理学部を卒業して教育現場で活躍する教師のリカレント教育の意味合いを含む教育実践力研究会についてはますますの充実を図っていきたいと考えている。

また、「高大連携」の取り組みについては、文理学部の学生が高等学校等の教育現場とのつながりを持つことにより現場での経験を積む機会を拡充するとともに、高校生が大学との連携の中で学び、成長できる機会を積極的に提供していく必要があると考えている。教職員も含めた学校間の連携の場は、筆者の経験からも教育活動の活性化と教育内容の質的向上に大きく貢献するものであると確信している。

あらゆる面から、「創造的で実践的な知の担い手」の育成を目指し、特に、困難や課題を抱える日本の教育の現場でその力をおおいに発揮できる人材の養成と、それを支える教職センターの教育・研究機能の充実に尽力していきたい。

1) 教職センター副センター長補佐